

紀要

- 石器製作からみた矢柄研磨器という道具…………… 重田 勉 (1)
- 近江湖西地域の土師器
—古墳時代中期から後期にかけて—…………… 籠尾 拓幸 (7)
- 滋賀県内出土の須恵器貯蔵器1
—古墳時代中期を中心に—…………… 高島 悠希 (13)
- 志賀・中村狐塚古墳測量調査報告…………… 辻川 哲朗・福井 知樹 (24)
- 犬上川右岸における集落の変遷
—彦根市福満遺跡を中心として—…………… 中川 治美 (37)
- 高島郡出土の底部糸切り土師器に関する基礎的研究
—「皿化」についての一考察—…………… 川嶋 泰輔 (51)
- 中世観音正寺の中心伽藍について
—観音寺城と観音正寺その(4)—…………… 伊庭 功 (61)
- 近江地域の近世銭貨…………… 森田 真由香 (70)

38

犬上川右岸における集落の変遷

—彦根市福満遺跡を中心として—

中川 治 美

目次

1. はじめに
2. 福満遺跡の概要
3. 福満遺跡の各期の様相
4. まとめ

— 論 文 要 旨 —

福満遺跡は、これまでに出土した縄文土器が基準資料として広く知られるためか、長らく縄文時代の遺跡というイメージが強く、縄文土器に言及されることが多かった。

2017～2018年度に行われた第23次調査では、縄文時代以降にも複数の画期があることが改めて確認された。2023年度にはこの調査成果が発掘調査報告書として刊行されるとともに、第26次～第30次までの調査報告書が彦根市より同時刊行され、その後2024年度には周辺遺跡の調査も新たに複数行われた。

本稿では、第23次調査報告書刊行以降に新たに得られた知見を加え、福満遺跡について再整理を行った。とりわけ、弥生時代・古墳時代の集落・墓域の広がりや、その後の飛鳥時代～平安時代の公的施設への変貌が認められ、また、これらの変遷が福満遺跡を超えて周辺にも及んでおり、周辺遺跡とあわせて捉えていく必要があることを示した。

——— キーワード

福満遺跡 犬上川右岸 彦根市 縄文時代 弥生時代 古墳時代 飛鳥時代 奈良時代 平安時代

1. はじめに

福満遺跡は1981年に最初の発掘調査が行われて以降、縄文時代～鎌倉時代の遺構・遺物が散見されるようになったものの、本遺跡出土の縄文土器が基準資料として広く知られているためか、長らく縄文時代の遺跡というイメージが強く、縄文土器について言及されることが多かった。

2017～2018年度に行われた第23次調査では、縄文時代～鎌倉時代の遺構・遺物がみられ、集落の変遷に複数の画期があることが改めて確認された。2023年度にはこの調査成果が発掘調査報告書として刊行されたほか（1）、同年度に第26次～第30次の調査報告書が彦根市から同時刊行された。さらに、この1年間に周辺遺跡の調査が複数行われ、福満遺跡に関連した研究報告が発表されるなどしている。

本稿では、広範に遺構の確認された福満遺跡第23次調査を中心に、改めて30次に及ぶ遺跡調査結果を俯瞰し、福満遺跡の各期の様相をまとめ直すこととしたい。

2. 福満遺跡の概要（図1）

福満遺跡は、彦根市西今町・小泉町に所在する縄文時代～鎌倉時代の複合遺跡である。

彦根市は琵琶湖東部に位置し、北部から西部にかけて琵琶湖に開けており、北東部は米原市、南は甲良町、豊郷町、愛荘町、東は多賀町、南西部は東近江市に接している。

また福満遺跡は、鈴鹿山系から琵琶湖へ注ぐ一級河川犬上川右岸下流域の自然堤防を含む氾濫原に立地する。遺跡の立地する周辺は、多賀町金屋付近を扇頂とする犬上川扇状地端部に近い湧水帯にあたり、扇状地の伏流水が自噴する湧水池が多く見られる。遺跡周辺は、灌漑施設がなければ水の得にくい扇状地と異なり、豊富な水に恵まれた地域である。また、湧水池の水は下流の用水ともなっている。

同遺跡は、1918年に市立城南小学校北側の水田下1m程から弥生時代後期の壺が出土したことから、遺跡として認知されるようになった。この土器は城南小学校に保管されている。最初に発掘調査が行われたのは、1981年のことで（第1次調査）、市立城南小学校の増改築工事に伴い実施された。以後これまでに、小学校・保育園・宅地造成・個人住宅・公共文化施設などの開発に伴い、2023年度までに30次の発掘調査が行われ、縄文時代前期から鎌倉時代までの遺構・遺物を伴う複合遺跡として知られるようになった。

3. 福満遺跡の各期の様相（図1～図8）（2）

福満遺跡の様相には、30次に及ぶこれまでの調査結果から大別して8つの画期が認められる。ここでは「福満遺跡1期」～「福満遺跡8期」として概観する（3）。なお福満遺跡の周辺では、同様の時期の遺構が確認されている。まず福満遺跡に隣接する竹ヶ鼻廃寺遺跡・品井戸遺跡・西

今遺跡・須川遺跡は共通性の高い性格の遺構を持ち備えており、一つの群として包括できるものと認識されるため、ここでは「福満遺跡群」として取り扱うこととする。福満遺跡群の須川遺跡の周知範囲内には「福満神社」が鎮座しており、福満とよばれる範囲の本貫地でもある。また上流域にあたる東側には丁田遺跡が存在し、縄文時代～平安時代を中心とした遺構・遺物が確認されている。丁田遺跡の北東側には高宮廃寺跡（遊行塚遺跡）が存在し、竹ヶ鼻廃寺遺跡と非常に距離の近い関係の寺院跡として知られている。さらに、福満遺跡群の北側には山之脇遺跡が所在し、古墳時代初頭期の動静が知られている。

これらの遺跡は、福満遺跡と深く関わりのあるものと考えられるため、具体的な遺跡の様相を加えながら、福満遺跡の各期の様相を示すこととしたい。

（1）福満遺跡1期 ―縄文時代の様相―

縄文時代前期には、福満遺跡第1次調査で前期末の大歳山式土器が1点報告されているが、周辺遺跡を含め同時期の遺構は確認されておらず、詳細は不明である。

中期には、福満遺跡第23次調査において明確な遺構は検出されなかったものの、河道A8区S9から土器が出土している。同中期末になると、福満遺跡南東の上流域に位置する丁田遺跡において堅穴建物と埋設土器が確認されている。墓の可能性のある埋設土器からは翡翠大珠が出土しており、北陸地方からの流通品と理解されている。また福満遺跡第3次調査では落ち込みから中期末の北白川C式～後期前葉の北白川上層式2期の土器が多量に出土しており、福満遺跡近隣においても生活域が想定される。

後期～晩期には、福満遺跡・品井戸遺跡で土器が出土しているほかは、建物など明確な遺構を伴う遺跡はみつからない。福満遺跡で出土している縄文土器の大半はこの時期のもので、福満遺跡第23次調査では河道A1区S9・河道A8区S9で出土しているほか、河道B区S47の肩部に後期前葉の北白川上層式2期の土器片がほとんど摩滅していない状態で確認された。この河道B区S47は、弥生時代後期以降の上層遺構面で土坑や小穴を掘削中に、遺構壁面に土器を含む土層を確認したことから、上層遺構面の基盤層を取り除いた下層遺構面で検出したものである。

さらに、福満遺跡第1次・第2次調査においても河道から多量に、後期～晩期後半を主体とする土器が出土しており、西日本における凸帯文系土器編年の基準資料のひとつになっている（泉1990・中村2008）。これらの土器もほとんど摩滅していない状態であった。こうした福満遺跡第1次・第2次・第23次調査の出土資料からは、縄文時代後期から晩期にかけての集落が近隣に存在した可能性が示唆される。

晩期以降には、県内においても稲作農耕文化が伝播することが知られる。福満遺跡では、石器は石鎌や磨石など狩

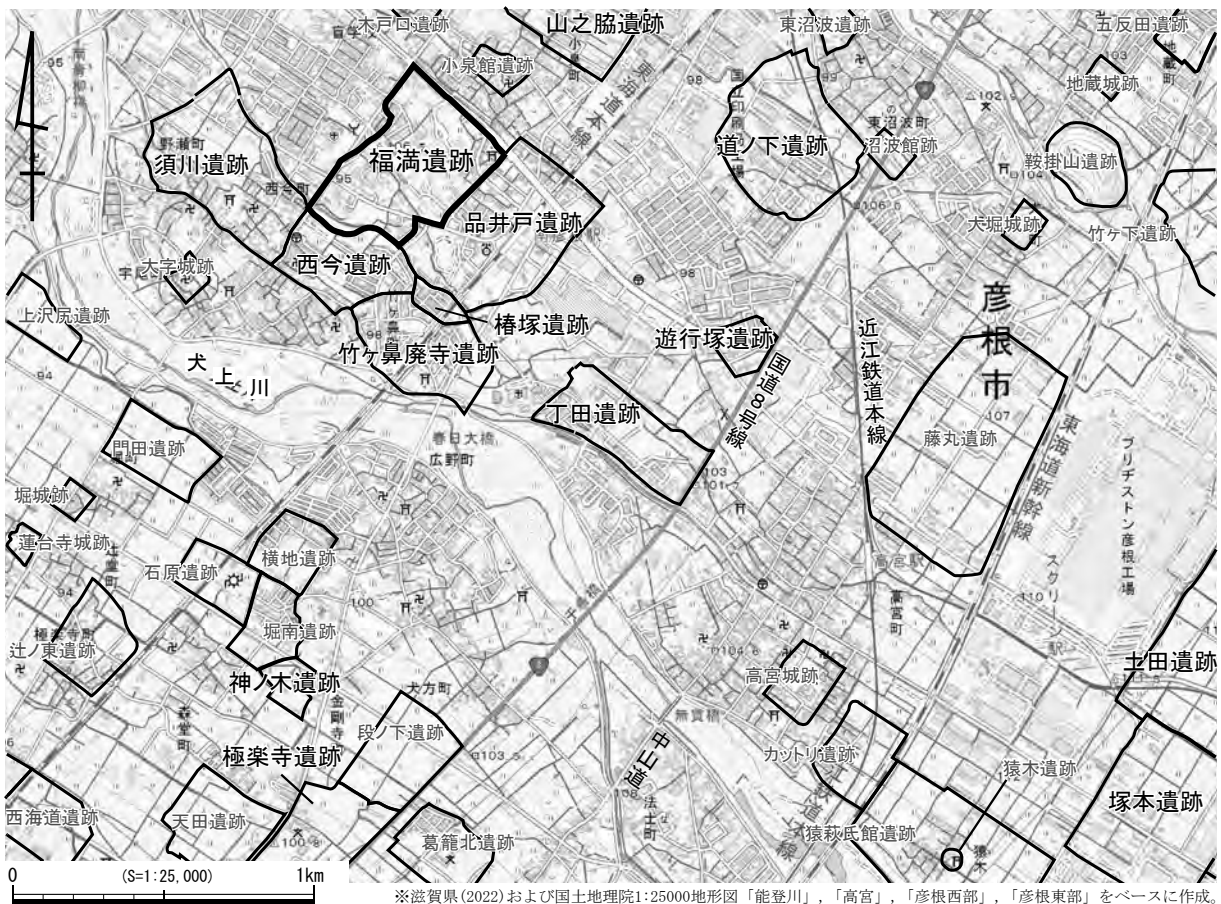
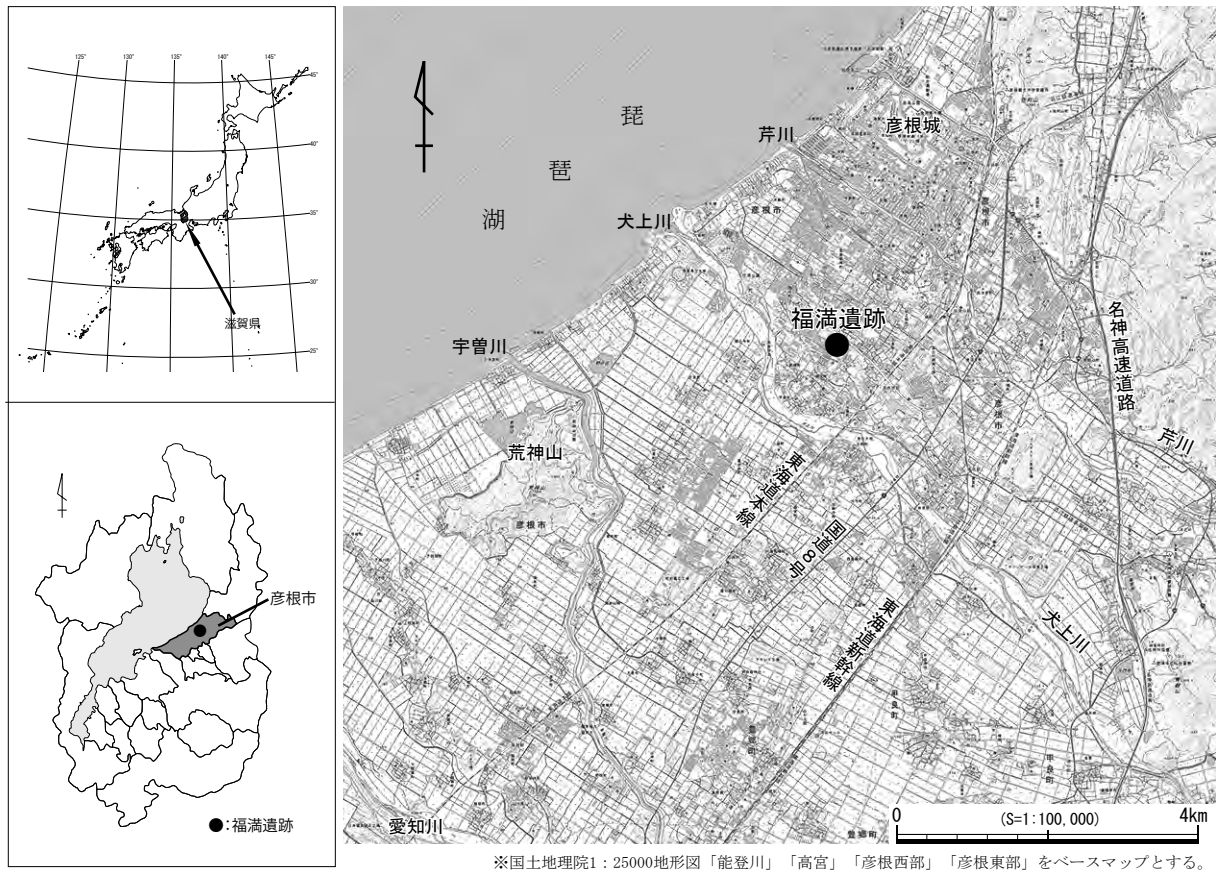


図1 福満遺跡の位置

猟・採集を主体とする縄文時代以来の内容であり、水田遺構や関連遺物は確認されていない。こうしたなかで土器については、福満遺跡第23次調査では河道A8区S9から晩期末～弥生時代前期の長原式や、壺王式と判断される東海地方の土器が出土しているほか、福満遺跡第1次・第2次調査で深鉢の頸部を絞った小型の「変容壺」とも呼ばれる、従来の鉢を元に新しい器種である壺を真似た土器が出土しており、農耕文化との接触が認識される。土器に関しては、西日本の縄文時代晩期の研究が進展する中で、当遺跡資料の補足調査から弥生時代成立期の土器形態を明らかにしようとする試みもみられる（西山・春名2024）。福満遺跡出土の当該期の遺物は、30次におよぶ調査のなかで、いまのところ明確な遺構に伴うものではないが、犬上川右岸下流域の氾濫原と微高地に形成される福満遺跡および周辺遺跡の、稲作農耕の伝播による変容期の様相を知る上で、注目される資料といえる。

なお、福満遺跡の縄文時代資料については、非常に知名度の高いものであるが、先述したように建物など明確な遺構はこれまで見つかっておらず、第1次・第2次調査では古墳時代の土器を伴って溝や落ち込みから出土しており、第23次調査でも大半が古墳時代以降の土器が多数を占める河道からの出土である。それぞれ調査地と近接する地点に当該期の集落があったことが想定されるが、出土資料は重層する複合遺跡の下層資料を抉り取った可能性を残している。一方、福満遺跡第23次調査では、かろうじて一部で、弥生時代後期以降の遺構面の基盤層を取り除いた下で縄文時代と考えられる下層の遺構面を確認し、河道B区S47を検出し、ほとんど摩滅のない後期後葉の土器のみが出土している。将来の調査においては弥生時代、古墳時代遺構面の調査終了後に基盤層を掘り下げ、下層遺構の有無を明らかにする必要がある。

当該期については、遺物は出土するものの遺構は不詳であることから一期にまとめたが、事例の増加によって今後細分されることが想定される。

（2）福満遺跡2期 ―弥生時代中期の様相―

福満遺跡の周辺に目を向けると、まず犬上川上流部兩岸の扇状地では、尼子遺跡の堅穴建物から、縄文時代晩期の土器と弥生時代前期の土器が共に出土しており、同様の共伴状況が小川原遺跡・金屋遺跡でもみられる。また、北落遺跡では溝状遺構と土坑から、縄文土器は伴わず弥生時代前期の土器のみが出土している。同遺跡の土坑SK1501は、4m前後の不整円の土坑で、水神平式の甕や貼り付け突帯を持つ壺などが出土しているが、溝状遺構SD1202埋土のプラント・オパール分析からは、稲作の痕跡は認められなかった（県教委・財協会1994）。三博・四ツ塚遺跡と横関遺跡ではそれぞれ弥生時代中期の土器が出土している（甲良町教育委員会1996）。

こうした状況からは、弥生時代において、水の得にくい扇状地では、農耕文化との接触は認められるが、容易に稲作を受け入れる環境にはなかったことがうかがえる。一方、福満遺跡から5kmほど南東に離れた犬上川下流域の氾濫原に位置する稲里遺跡では、土坑からイネ炭化胚乳とともにアワ・キビの炭化胚乳がまとまって出土している。

これらのことは、福満遺跡周辺において稲作の受容・開始と展開が様でなかったことを示している。

氾濫原に所在する福満遺跡とその近隣では、竹ヶ鼻廃寺遺跡で土器が出土しているほかは明確な遺構は確認されておらず、実態はわかっていない。今後は同地域の稲作受容と展開の在り方を明らかにするとともに、福満遺跡においてもその詳細な時期や内容の判明することが期待される。

福満遺跡で遺構を伴う明瞭な生活の痕跡が確認されるのは、いまのところ弥生時代中期以降である。福満遺跡第25次調査において弥生時代中期の方形周溝墓15基が検出され、墓域の広がり確認された（図3）。周溝墓の規模は周溝の内側で3～6m前後のものと、8～10m前後の大形のものがある。同調査では、墳丘規模・軸の方向・周溝共有の有無・周溝の形態・周溝の規模・連結の有無などの特徴から、検出された周溝墓が4群に分かれ、弥生時代中期前葉から中期後葉までの間でおおむね東から西に向かって、群単位の変遷が確認された。このうち遺物や重複関係から時期の明らかな3群がそれぞれ中期前葉・中葉・後葉のもので、中期前葉～中期中葉までは周溝を共有して墓が隣接し、中期後葉には周溝を共有しなくなり墓同士が一定の距離を置いた配置へと変化する様子が捉えられた。さらに、各群は互いに重層関係がなく前代の周溝墓を損なわないよう計画的配置がなされていた（林2020）。調査面積の多寡もあろうが、この第25次調査の成果は犬上川流域において弥生時代中期の方形周溝墓がまとまって確認された貴重な事例として捉えられる。

こうした福満遺跡の墓域の広がりについては、方形周溝墓がまとまって検出された第25次調査を中心に、その北東部に隣接する第16次調査においても方形周溝墓の一部が見つまっている。福満遺跡周辺の墓域の広がりとは、第25次調査区を中心に、北東部・南西部についてはこれ以上の広がりはないと推定され、北西部はより新しい時期の墓域の展開の可能性が示唆される。また南東部についてはさらに広がることが想定されるが、その範囲についてはいまだ明確ではない。

このように、弥生時代中期の福満遺跡の様相については、第25次調査成果によって中期の墓域の一端がとらえられるようになってきた。一方、当該期の水田などの生産域の調査事例は皆無である。また集落については犬上川流域では扇状地の扇端部から下流域の沖積低地に集落が展開する傾向にあり、福満遺跡から南東にやや離れた宇曾川流域で、肥田西遺跡・川瀬馬場遺跡が中期の集落として、中期～後

期の集落として妙楽寺遺跡が知られるが、福満遺跡とその周辺では当該期の集落域は見つかっていない。弥生時代中期においては、墓域について、かろうじてその一端が明らかになってきた中期前葉から後葉にかけての詳細、またその前後の墓域の所在を含めた実態、さらに当該期の集落域および水田などの生産域の解明が今後の課題となる。

（3）福満遺跡 3期 —弥生時代後期の様相—

福満遺跡で明確な建物遺構を伴う集落が確認される時期である。福満遺跡第23次調査において、竪穴建物2棟が検出されている。それぞれ平面形が方形を呈し、一辺が約6m・約3.5mのものであり、中央付近に炉が確認されるものもある。また同第28次調査において、平面形が五角

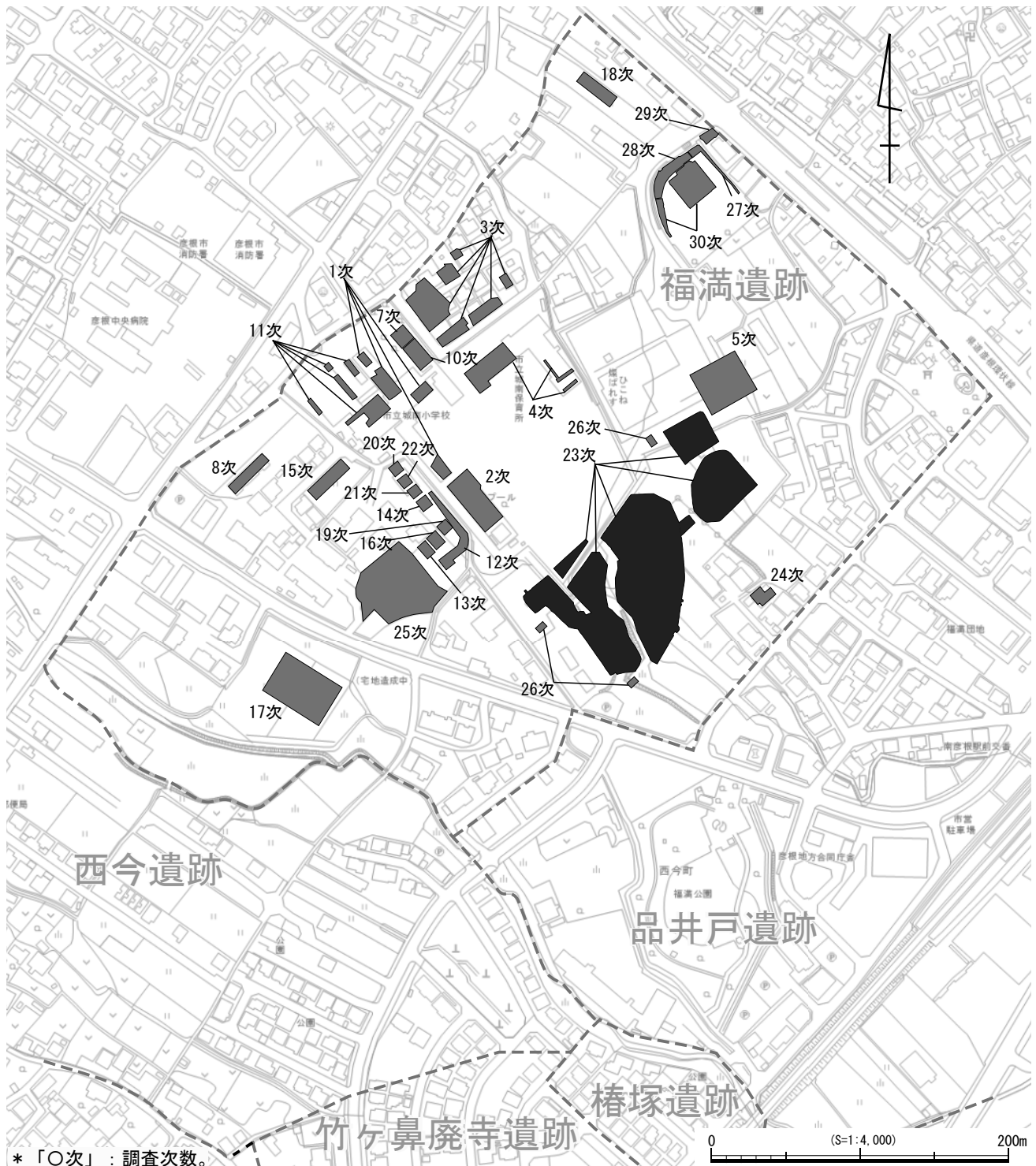


図2 福満遺跡 第1次～第30次調査位置図

形ないし六角形と考えられる多角形竪穴建物1棟（SH14）が検出され、主柱穴構成は六角形になるものと想定される。

さらに当該期には、前段階に福満遺跡で展開された墓域が姿を消し、近隣の品井戸遺跡で大形の方形周溝墓が確認されている（図4）。近年行われた品井戸遺跡第5次調査によって現在の「福満公園」の西側で検出された方形周溝墓SX0501は、全長30.13m、墳径21.75mと記されている。方形周溝墓SX0501については品井戸遺跡第8次調査においてマウンド北東部の一画が調査され、計6基の主体部が確認されている。このほか品井戸遺跡第5次調査において方形周溝墓2基（SX0502・SX0503）、品井戸遺跡第11次調査においても方形周溝墓1基（SX1101）が確認されているほか、福満遺跡第5次・第8次・第18次調査等で弥生時代後期～古墳時代初頭とみられる方形周溝墓が散見される。

これらのことから、福満遺跡2期で方形周溝墓による墓域の造営が始まり、福満遺跡3期で場所を品井戸遺跡側に移動させ、大形のものを含めた方形周溝墓による墓域の造営が再開するとみられる。また、2期で弥生時代中期前葉～後葉をととして福満遺跡の同じエリアに営まれた墓域が、その後3期の後期には同エリアから全く姿を消し、少し離れた品井戸遺跡に展開されることも留意される点である。弥生時代中期後葉から後期初頭にかけては、遺跡の断絶や移動が近畿地方で広範に確認されており（4）、自然災害による影響など、その要因と地域の実態の解明については今後の課題となろう。

なお、当該期には、居住区域・墓域は明らかにされているものの、水田などの生産区域の存在は不明である。

（4）福満遺跡4期 ―古墳時代前期の様相―

福満遺跡では前段階に引き続き集落が営まれ、庄内式期と布留式期に細分される。福満遺跡第4次調査において庄内式期の竪穴建物が確認されており、福満遺跡第23次調査では布留式期の竪穴建物3棟が検出されている。竪穴建物は一辺が4～5mほどのもので、中央付近に炉を持つ。

庄内式期に相当する古墳時代初頭の遺跡については、従来は彦根市域での確認事例が少なかったが、近年では福満遺跡のほか、その北側の山之脇遺跡、西側の須川遺跡に分散傾向を示す一つの群が構成されており、市域南部の稲部遺跡、稲部西遺跡、彦富遺跡等に広がりをもせる一群、市域東部の塚本遺跡から多賀町土田遺跡に広がる一群などを初めとして、多くの遺跡で同時期の遺構・遺物が発掘調査によって明らかになってきている。また、品井戸遺跡第2次調査では、全長20.8m、墳径15mを測る大形の方形周溝墓SX0201が、現在の「福満公園」の北側で検出されている。

次に布留式期に相当する古墳時代前期の遺跡については、福満遺跡群の竹ヶ鼻廃寺遺跡でも竪穴建物が確認され

ている。この建物は後述する「整地土」と呼ばれる土層を取り除いた下層から見つかった。これは竹ヶ鼻廃寺遺跡第1次調査で発掘されている竪穴建物群と同じ群を構成することが推定される。竹ヶ鼻廃寺遺跡第15次調査で確認された竪穴建物は一辺8mを超える大形のもので、建物掘方の内縁に幅0.15mほどの壁溝を持ち、その両側には直径約0.1mの柱穴が並ぶ。さらに約1m外側にも、同様の壁溝と柱穴が確認されており、竪穴建物周堤の外を構成するものと考えられている。また、竪穴建物の東辺中ほどには大形の屋内土壇が設けられ、建物内部には中央付近に炉を備えている。滋賀県内ではおおむね弥生時代中期頃から竪穴建物の平面形状が円形から方形になり、その後は多様な構造のものがあることが知られる。竹ヶ鼻廃寺遺跡第15次調査で検出された周堤を持つ建物構造は、福満遺跡のこれまでの調査では検出されていないものである。一方、犬上川右岸域では福満遺跡に隣接する品井戸遺跡や上流域に所在する塚本遺跡でも確認されているほか、左岸域では極楽寺遺跡などで検出されている。近隣の竹ヶ鼻廃寺遺跡でみられる周堤を持つ建物構造が、地域的なものであるのか、バリエーションのひとつであるのか、福満遺跡でも検出される可能性があるのかといった課題は、今後の調査の建物精査によって明らかにされることが期待される。

なお当該期の集落域や墓域の広がりには徐々に判明しつつあるが、墓域の詳細や水田などの生産区域の存在は不明である。

（5）福満遺跡5期 ―古墳時代中期の様相―

福満遺跡では、古墳時代中期も引き続き集落が営まれる。第23次調査では、竪穴建物2棟が検出されている。A5区S279は、建物北東辺の中央より北寄りにカマドを備える4本主柱の建物である。カマドは、袖や天井部が失われており、燃焼部と奥壁から延びる煙道をわずかに外に張り出す構造を呈する。滋賀県内で確認される竪穴建物の造り付けカマドは、おおむね古墳時代中期後半以降に採用されたと考えられており（宮崎1992）、今回の調査結果はカマド採用期の事例として興味深い。

もうひとつのA3区S1は後出する溝により中央部を大きく削平されており、建物内の諸施設などの詳細を捉えるのは困難であるが、軟質の朝鮮半島系土器が確認された。

同時期の遺構については、福満遺跡群の品井戸遺跡第6次～第11次調査で確認が相次いでおり、壁構材の痕跡がみられる深い壁溝、周堤の外を構成する建物構造を持つ事例が増加している（5）。

また、福満遺跡第15次調査では溝から朝鮮半島系土器が出土しているほか、中期後半の埋没古墳がみつかり、埴輪片も出土している。朝鮮半島系土器については、硬質のものと、軟質のもの二種類が知られており、古くは「韓式土器」と呼称されてきた。彦根市内では、福満遺



図3 福満遺跡第25次調査の方形周溝墓群（2期）

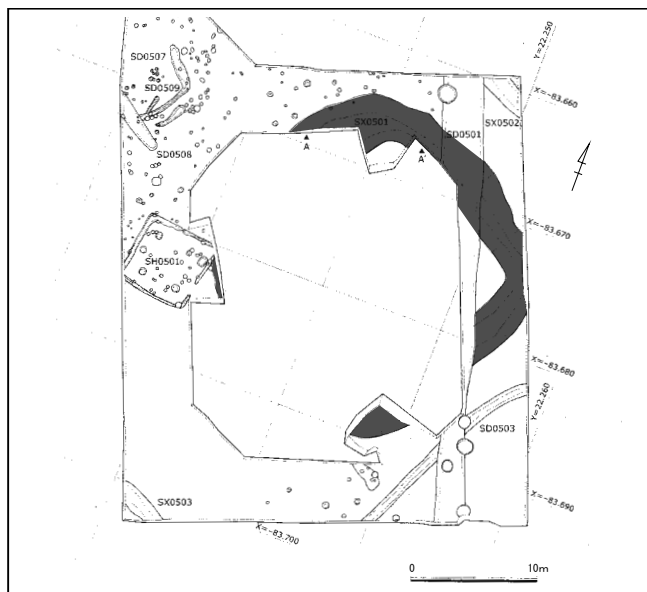


図4 品井戸遺跡第5次調査の大形方形周溝墓（3期）

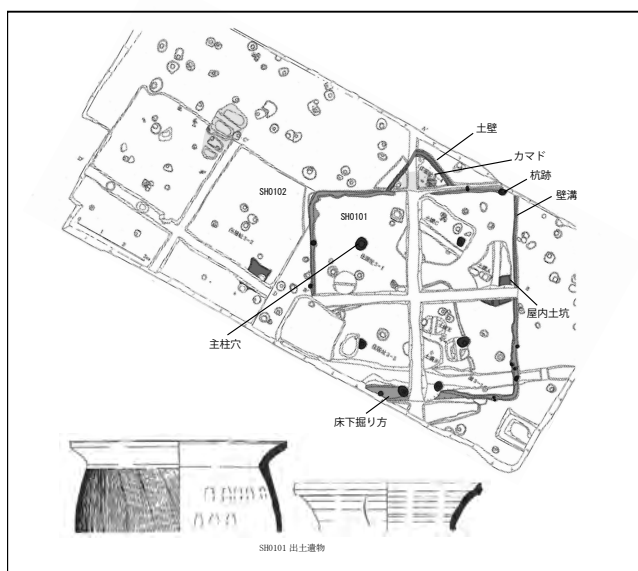


図5 福満遺跡第1次調査第3トレンチ SH0101（5期）

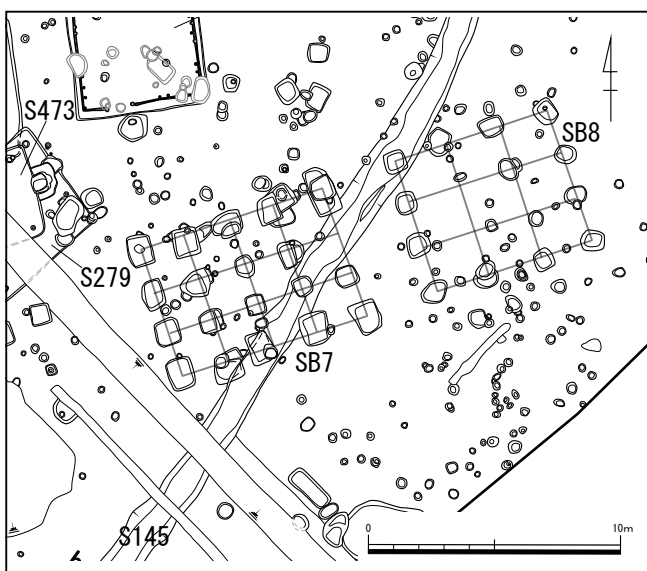


図6 福満遺跡第23次調査の総柱建物（7期）

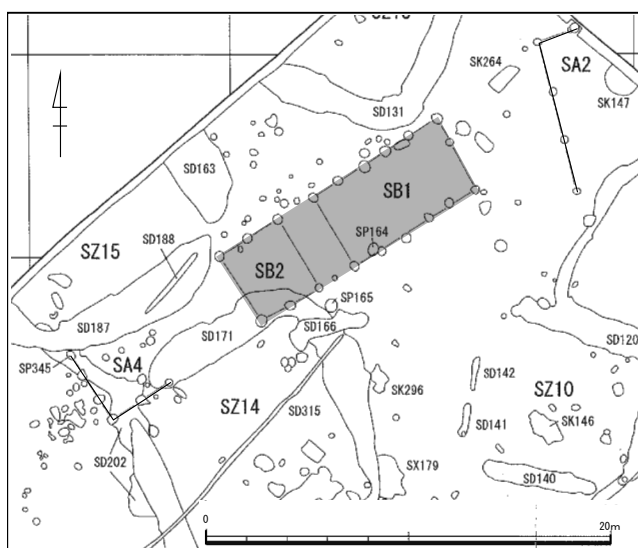


図7 福満遺跡第25次調査の建物群（7期）



図8 竹ヶ鼻廃寺遺跡の官衙建物群（7期）

跡の他にも広範囲に発見されており、硬質のものでは稲部遺跡で非常に焼け歪んだ状態のものが確認されており、搬入ではなく地元生産の可能性をも含み再検討する必要がある。また軟質土器は、極楽寺遺跡第2次～第4次調査で格子目叩きをおこなった後に、ハケ調整を行う甕などもみられ（6）、渡来系移住民二世の動向も検討材料となる時期に差し掛かっていると考えられる。福満遺跡の所在する琵琶湖東部の湖東地域には依知秦氏など、いわゆる渡来系氏族との密接な関りが従来から指摘され（彦根市 2007、大橋 2010）、国策としての蒲生郡・神崎郡への渡来系移住民による開発（7）などの政策が知られている。朝鮮半島系土器を所有する福満遺跡の建物を含め、当該期に展開される集落も、こうした渡来系移住民との関りが示唆される。なお当該期の生産区域については不明である。

（6）福満遺跡6期 ―古墳時代後期の様相―

福満遺跡で集落が拡大する時期である。集落は竪穴建物を主体に構成されており、第23次調査では、竪穴建物5棟、溝が検出された。これらの竪穴建物はいずれも平面形状が方形で、一辺5m前後の規模を呈する。確認できたものは4本主柱のものである。建物の北または北東辺、北西辺、南東辺の、中央やや左右いずれかに寄せて、壁面に造り付けのカマドを持ち、カマド奥部、あるいは煙道部を建物から外に張り出す。

当該期の竪穴建物は少しずつ異なる構造を呈しており、このうち、A5区S209は北辺中央部にカマドを持ち、カマド袖部前方に焚口飾りあるいは門柱石の痕跡とも思われるカマドを補強するための造作と考えられる小穴が配置される。カマド構築時の補強材としては、石のほか土器や瓦が用いられることがあることが知られるが（桐生 2007、県教委・財協会 1996、佐伯 2015、（財）京都市埋蔵文化財研究所 2006）、この建物のカマドは焚口前面のみを補強していたものと推定される。

カマド袖と東辺の間には平面形が隅丸方形の屋内土坑を設ける。また建物掘方縁部には壁溝が巡り、壁溝の内側にはこれに沿うように小穴（壁支柱）が並ぶ構造を呈する。この壁溝はほぼ全周するが、カマド部とその対面の一部では壁溝が途切れる。カマド対面の壁溝の途切れる部分は入口施設の可能性が示唆される。カマド背後の壁構造については不明であるが、壁溝の巡る部分とは別の構築材であることが考えられ、土壁が想定される。福満遺跡第1次調査の遺構図資料からは「V字形土壁」が復元されている（図5、宮崎 2024）。またカマド袖部前方に焚口飾りあるいは門柱石の痕跡とも思われるカマドを補強するための造作と考えられる小穴が配置されることについては、犬上川左岸中流部の極楽寺遺跡第2次～第4次調査に同様の傾向が認められる。

またA3区S312の北西辺に構築されるカマドは、A5

区S209のカマド同様、焚口付近の両側に小穴を持つほか、カマド南東側に棚状施設と考えられる平坦面を設ける。このカマドは長軸が約1.6m、残存する煙道部を含めると約2mの細長い形状を呈しており、縦方向の2つ掛け構造のものであった可能性を持つなど、カマド構造も多様である。

さらに、A5区S360では貼床が良好に検出された。この竪穴建物は北東辺中央部より南寄りにカマドを設け、建物内縁部には壁溝が確認された。建物掘方基底部の一部には厚さ約4mmの均質で硬い橙色土の貼床がみられた。当該建物は一部に直径2～10cm程の礫が多量に混じる基盤層に築かれており、床面を平滑にして、居住性を向上させるための造作と推定される。一方、第23次調査で他に検出された竪穴建物には明確な貼床は確認されておらず、建物はシルト質を主体とする基盤層を掘り込んで造られていた。福満遺跡では生活面である床面の居住性を一定の水準にするため、また快適性を高めるために、建物の一部に貼り床を採用していたと考えられる。

福満遺跡第23次調査で検出されたA5区S209のように、壁溝と支柱を備える事例は福満遺跡のこれまでの調査では確認されない構造のものであるが、極楽寺遺跡（6世紀）や、時期は異なるものの、神ノ木遺跡（2世紀）・塚本遺跡（3世紀）・竹ヶ鼻廃寺遺跡・品井戸遺跡（4世紀）などの近年の彦根市内の調査で検出されており、滋賀県内外でもみられる構造である（望月 2007、宮崎 2021）。福満遺跡周辺の竪穴建物について、今後の調査事例の増加により、建物構造の検討がなされることに期待したい。

集落の広がりについては、これまでに行われた第4次調査や、近隣の竹ヶ鼻廃寺遺跡第1次～第4次調査においても当該期の竪穴建物が複数検出されており、福満遺跡近隣では古墳時代後期集落の広がりが広範に認められる。

さらに埋没古墳の存在について、福満遺跡第24次・第28次・第29次調査、須川遺跡第11次調査などでも検出されており、犬上川右岸に広範囲な後期の埋没古墳の存在が知られる。

（7）福満遺跡7期 ―飛鳥時代～平安時代前期の様相―

福満遺跡では、掘立柱建物を主体とした遺構群が大規模に展開される時期である。

福満遺跡の検出遺構と周辺遺跡 第23次調査では、竪穴建物1棟（A5区S473）、掘立柱建物13棟（A2区SB1・SB2、A3区SB3～SB6、A5区SB7～SB10、A7区SB11・SB12、C区SB13）・柵（A2区SA1）・溝（A3区S2・A7区S45）などが確認されており、これらは6期の竪穴建物や溝など古墳時代後期までの遺構が埋まった後、7世紀以降に新たに広範囲に構築されている。

検出遺構のうち竪穴建物A5区S473については、一辺が約3.5mと小型で、カマドをすべて外方に突出させる構造を持つ。この竪穴建物は掘立柱建物と併存していた可能

性もあり、性格については留意される。また、A 3 区 SB 7 は総柱構造を持つもので、その北東に軸をそろえて並ぶ A 3 区 SB 8 も総柱建物の可能性があり、A 3 区 SB 7 の南西に位置する掘立柱建物 A 3 区 SB 9 とともに東西棟建物である（図 6）。

掘立柱建物は大きく 2 方向の主軸方位を持ち、建物主軸を西傾させるもの（「福満遺跡 7 期 A 群」とする）と、正南北方位に近いもの（「福満遺跡 7 期 B 群」とする）に大別される。

前者（福満遺跡 7 期 A 群）は、N18° W ～ N35° W を指向する。詳しくみると N18° W ～ N24° W の一群と、40 m ほど西に離れた N30° W ～ N35° W の一群が広がる。第 23 次調査の西方で行われた第 25 次調査でも、N32° W を指向する掘立柱建物や柵列が検出されており、第 23 次調査で検出された建物と一群のものと捉えられる。なお第 25 次調査で検出された掘立柱建物 SB 1・SB 2 は柱並びや主軸方位、柱間がほぼ同じであり、一連の建物となるように見受けられ、その場合は長舎とも捉えられるものである（図 7）。これらが同一時期の距離的な差による主軸の振れであるのか、東側と西側の一群で時期差をもつのかは現段階では判断し難い。いずれにしろ、隣接する建物間の距離などから鑑みて、主軸を西傾させる A 群の時期はさらに細分される可能性を持つ。また福満遺跡第 30 次調査では、時期は不明であるが南北方位建物に先行して N40° W に主軸を持つ道路遺構とされる溝が検出されており、古代東山道と集落をつなぐ道路の可能性が指摘されている（彦根市 2024c）。

後者（福満遺跡 7 期 B 群）は、N 5° W ～ N 8° W を指向する第 23 次調査 A 5 区 SB10・C 区 SB13 のほか、第 28 次・第 30 次調査では時期は判然としませんが、N 2° E ～ N 6° E の掘立柱建物が複数等検出されており、ほぼ正南北方位を示す遺構群が福満遺跡の北端にまで及んでいることが確認された。

なお福満遺跡 7 期 A 群同様、主軸を西傾させる遺構は、福満遺跡群の周辺でもみられる。福満遺跡の北東に位置する道ノ下遺跡では 7 世紀後半～8 世紀前半の堅穴建物および N33° W ～ N34° W に主軸を持つ掘立柱建物が検出されている。また南東に所在する丁田遺跡は、白鳳期創建の高宮廃寺跡に推定される遊行塚遺跡の 300 m 程南西に位置し、7 世紀後半～8 世紀前半に一辺 2 ～ 3 m の小型の堅穴建物群が形成され、8 世紀後半～9 世紀前半には小型の堅穴建物に N31° W ～ N40° W に主軸を持つ掘立柱建物群・柵を加えた構成へと移行し、9 世紀後半以降には耕地化が進む様子が確認されている。小型の堅穴建物は同時期の官衙や寺院に伴う工房跡と考えられている。

福満遺跡群から犬上川の対岸に位置する神ノ木遺跡第 1 次調査では 30 枚以上の和同開珎がいくつかの群をなして遺物包含層から出土しているほか、神ノ木遺跡第 2 次調査

においても一辺 1 m 前後の大きい柱穴掘方が検出されているなど、周辺の奈良時代の様相をうかがわせている。

福満遺跡群においては、品井戸遺跡で、ほぼ正南北方位の総柱建物のほか、N15° W ～ N26° W に主軸を持つ掘立柱建物が検出されている。いずれも時期は不明である。須川遺跡では、時期不明の、ほぼ正南北方位に主軸を持つ掘立柱建物が確認されている。

また、竹ヶ鼻廃寺遺跡では、当該期に広範囲な遺構の拡がり確認されており、福満遺跡群を考える上で欠かせない事例である。しかしながら、竹ヶ鼻廃寺遺跡は寺院と犬上郡衙推定域、またそれ以外の遺構など時期や性格を混同されることもしばしば見受けられ、ここで同遺跡について概観し、整理しておく。

竹ヶ鼻廃寺遺跡の様相 飛鳥時代後期の白鳳期には各地に寺院が建立される。滋賀県内でも遺跡から出土する瓦によって多くの寺院が存在したと想定されるものの、当時の寺院名がわかっているものはわずかで、建立された経緯のわかるものもほとんどない（彦根市 2007）。福満遺跡周辺においても例外ではなく、白鳳期の寺院の詳細についてはよくわかっていないのが実情であり、竹ヶ鼻廃寺もその一つである。

竹ヶ鼻廃寺遺跡は古瓦の散布地として古くから知られ、採集された瓦によって白鳳時代創建の犬上郡最古の郡を代表する古代寺院と考えられてきた。同遺跡においては、犬上郡に広く普及する N31° E ～ N34° E の条里地割のなかにあつて、小字「上寺街道」「下寺街道」「石仏」「薬師堂」「四反地」には、ほぼ正南北の地割を呈しており、この東西約 200 m・南北約 300 m の範囲に寺域が想定されてきた。1983 年以降複数回の発掘調査が行われ、現在「竹ヶ鼻公園」として整備されている箇所で行われた竹ヶ鼻廃寺遺跡第 3 次調査では、寺院跡とされている範囲が瓦を多く含む厚さ 20cm 程の土を盛って整地されており、その整地土を基盤層として、ほぼ正南北に主軸を持つ総柱建物や東西棟建物、柵列など、規則性をもった掘立柱建物群がまとまりを持って広範に検出された（図 8）。整地土の時期は、含まれている遺物などから奈良時代後半～平安時代頃と考えられている。

調査では整地土に多くの瓦がみられたものの、塔や金堂、講堂などの礎石建ちの寺院関係遺構は検出されなかった。一方、隣接する品井戸遺跡からは石帯など、官衙的な性格を示す遺物がみついている。これらから現在では、寺院は近隣に存在していたものの、当初に寺域と想定された範囲は官衙的施設で、犬上郡衙の可能性が高いとされている。

竹ヶ鼻廃寺の時期については、出土した瓦のうち最古形式のものが山田寺式のもので、湖東平野でも古い様相のものとして認識されており、早い段階で創建されたものと考えられている。さらに、周辺のほかの古代寺院と推定されている出土瓦より新しい段階である平城宮式のものを含む

ため、竹ヶ鼻廃寺は7世紀後半～8世紀代の寺院と捉えられている（北村 2001）。しかしながら、寺院址の位置や具体的な範囲については、依然として明確ではない。

その後、竹ヶ鼻廃寺遺跡第6次調査では、遺跡の南東縁部で、平安時代末～鎌倉時代の整地土の下層に部分的に平安時代末の水田、さらに下に平安時代以前の遺構が存在するとされた。竹ヶ鼻廃寺遺跡第11次調査では整地土について、竹ヶ鼻廃寺遺跡のなかでも整地状況が一様でないことが示唆された。

また竹ヶ鼻廃寺遺跡第15次調査では、古墳時代前期の堅穴建物を非常に堅緻に埋め、掘立柱建物を建て、さらに廃絶後に盛土整地して再度、掘立柱建物を建てた状況が確認されている。同調査では、約20cmの厚さをもつ奈良時代後半～平安時代頃の整地土の下に、主軸方位を西へ20°ほど傾ける7世紀頃の掘立柱建物が確認されている。また同整地土の上には南北方位を示す掘立柱建物および、主軸を西へ大きく傾ける掘立柱建物が検出されている（8）。

さて、竹ヶ鼻廃寺遺跡で検出された掘立柱建物のうち、南北方位を示す掘立柱建物群は、整地土との関係から奈良時代後半から平安時代頃と捉えられている。遺跡の南東部では、主軸を東に振るものがあり、周辺に広く普及する条里方位および河川の影響を受けたと思われる方位を示しており、平安時代末～鎌倉時代以降のものと推定される。一方、主軸を西傾させるものもみられるが、このなかには15次調査でみられるように整地土の下から7世紀頃と考えられる掘立柱建物が検出されている。

このような状況を踏まえ、竹ヶ鼻廃寺遺跡の検出遺構について整理すると、①当初寺域と想定されてきた南北地割景観の広がる区画には、発掘調査の結果、寺院遺構は検出されず、遺跡名ともなっている竹ヶ鼻廃寺そのものについては寺院規模や位置等その実態は不詳であり、出土瓦から7世紀後半～8世紀代の年代が与えられている。②当初寺域と想定されてきた区画にはほぼ正南北方位を指向する掘立柱建物がまをもって広範に検出されている。また、この建物群は犬上郡衙の可能性が高いと考えられている。③この南北方位建物群は廃絶寺院の瓦を含む整地土の上に構築されており、建物群は整地土の年代からは奈良時代後半～平安時代頃と捉えられる。④この整地土は竹ヶ鼻廃寺遺跡に広範に認められ、整地土の上・下には西傾する主軸を持つ掘立柱建物が確認されている。⑤掘立柱建物群以前に古墳時代前期・後期の堅穴建物群が展開されている。以上のことが整理される。なお、竹ヶ鼻廃寺の廃絶と整地土については、霊亀二年（716年）寺院併合令の影響や自然災害等も検討に加える必要があるものと想定されるが、本稿では課題提起に留めたい。

以上のように竹ヶ鼻廃寺遺跡の変遷は、古墳時代前期の堅穴建物を主体とする集落の出現、古墳時代後期の堅穴建物を主体とする集落の広がり、白鳳期～奈良時代頃に存在

した竹ヶ鼻廃寺、奈良時代後半～平安時代頃に廃絶寺院の瓦を含む整地土の上に建造された規則性を持って建ち並ぶ南北方位の掘立柱建物群、その前後に展開される堅緻な埋め立てや盛土整地を伴う掘立柱建物の展開が捉えられる。この中には南北方位建物群に先行して、主軸を西傾させる7世紀頃の掘立柱建物が確認されている。

福満遺跡の掘立柱建物の時期 福満遺跡で検出されている当該期の掘立柱建物は、いまみてきたように主軸方位が西傾するA群と、ほぼ正南北方位を示すB群があり、福満遺跡群のほかの遺跡にも広がりを見せている。

前者の主軸を西傾させるA群については、第23次調査では出土遺物と遺構の重複関係から7～8世紀頃のものとして判断された。また、第4次調査では、N12°Wを指向する2棟の掘立柱建物、N32°Wを指向する平安時代前期以前の総柱建物を含む4棟の掘立柱建物が確認されている。第28次・第30次調査では時期は判然としないが、南北方位建物に先行してN40°Wに主軸を持つ道路遺構とされる溝が検出されているほか、それに後出して12世紀とされる主軸の西傾する掘立柱建物あるいは柵が検出されている。さらに、福満遺跡群においては、品井戸遺跡で、ほぼ正南北方位の総柱建物のほか、N15～26°Wに主軸を持つ掘立柱建物が検出されている。いずれも時期は不明である。また、品井戸遺跡第5次調査では整地土の下でN19°Wに主軸を持つ溝が検出されている。さらに、竹ヶ鼻廃寺遺跡では、南北方位建物群が造営される整地土の上・下から主軸を西傾する掘立柱建物が確認されている。

このように、主軸を西傾させる遺構には年代が判然としないものもあるが、奈良時代後半～平安時代頃と考えられる南北方位を示す遺構群に先行するものが認められる。一方、先に触れたように、A群の主軸にはやや振幅も感じられ、それぞれの建物の先後関係や詳細な時期については検討の余地があるものとする。当該期の福満遺跡群で検出された遺構の詳細時期については、事例の増加が待たれるとともに、今後の検討課題の一つであるといえる。

なお、掘立柱建物は概して出土遺物が多くはなく、報告されている出土遺物のなかには柱穴掘り方中の出土位置が不明なものもある。続く中世集落の展開や耕地化の際に、柱穴掘方の最終的な堆積土中に混在したものの可能性も否定できず、当該期の掘立柱建物の帰属時期についても検討の余地を残す。また、当初竹ヶ鼻廃寺遺跡で確認された「整地土」については、近年品井戸遺跡でも確認されており、竹ヶ鼻廃寺遺跡のみならず広範囲に及んでいることが想定される。今後、当該期の建物遺構を考えるにあたっては、出土遺物とともに、その出土位置、他の遺構との重複関係、そして整地土との関係も併せて慎重に検討していく必要があると思われる。

後者の南北方位を指向するB群の時期は、その主軸方位から近接する竹ヶ鼻廃寺遺跡の官衙建物群との関係が想

定され、奈良時代後半～平安時代前期頃のものと考えられる。

福満遺跡検出遺構群の性格 福満遺跡第23次調査で検出された遺構群は、倉庫と考えられる総柱建物を含む掘立柱建物群が同様の軸を呈して広がる状況から、当該期には、物資の集約や管理を担ったと考えられる施設が広範に展開されていたと推定される。倉庫はいまのところ2棟のみで、多くが建ち並ぶような状況ではなく、一時的保管を行うような施設、または、広範囲の物資というより郷など近隣の物資の集約を担う施設と判断される。

また、福満遺跡第25次調査では長舎と考えられる建物も検出されており、公的性格を帯びた施設が展開されていたことが想定される。

福満遺跡群では、当該期の建物群構築に伴う整地も広範囲に確認されている。竹ヶ鼻廃寺遺跡の南北方位建物群を主体とする官衙的施設はもとより、福満遺跡周辺においても広範に規格性をもった施設が展開されていた。そして、そうした施設を構成する建物群の中心は、福満遺跡群内のなかで移動したことも想定される。ただし、その性格については、竹ヶ鼻廃寺遺跡の南北方位建物群は官衙的性格の遺構群とされているが、福満遺跡の当該期の建物群は軸をそろえて並ぶ様子などはみられるものの、いかなる性格のものであるかを断定するのは現段階ではいささか困難である。第23次調査の出土遺物には当該期の転用硯と思われるものや鉸具があるが、いずれも河道からの出土であり、福満遺跡の遺構の性格を直接的に示しているとは言えない。しかしながら、福満遺跡群では、当該期の建物群構築に伴う整地も広範囲に確認されており、前代の建物や溝の埋まった後に倉庫と想定される総柱構造の建物を含む掘立柱建物群が広範に広がる状況は、公的あるいは地域の有力豪族の関与が想定される。

竹ヶ鼻廃寺の建造には、出土瓦の検討から、遣隋使および遣唐使など対外関係における活躍の著しい犬上君御田鋤に代表される、犬上郡を本拠地とする郡名を負う犬上氏が想定されている（北村 2001）。竹ヶ鼻廃寺遺跡の官衙推定域の井戸 SE-27-1 から出土した中国大陸や朝鮮半島で用いられていた木葉形の先端を持つ匙は、こうしたつながりをうかがわせる顕著なものとして認識される。一方、特に7世紀以降には耕地開発をはじめ、様々な公的施策が行われることが知られる。

福満遺跡の当該期の一群の遺構の性格や、事業主体、詳細な年代などについては、周辺での調査事例の増加を待ち、今後の解明に期待したい。

（8）福満遺跡8期 ―平安時代中期以降の様相―

福満遺跡群において耕地化が進み、中世集落が展開される時期である。福満遺跡第23次調査では、平安時代後期の井戸1基、鎌倉時代の井戸1基、溝が検出された。溝に

ついては、犬上郡に広く普及する条里方位 N31～34° E を示すものがある一方、現行の地割に即したものもある。犬上川に近接することから、条里が及んでいない、あるいは条里の普及後に洪水などで再開発が行われたものとも推定される。さらに、福満遺跡第1次調査でも井戸がみついているほか、福満遺跡群でも西方の須川遺跡では平安時代後半の集落が断片的に捉えられ、西今遺跡では室町時代の掘立柱建物がみついている。また、福満遺跡からはやや離れるが、平安時代～鎌倉時代の集落が国領遺跡や普光寺遺跡、市遺跡などで確認されており、宇曽川流域に所在する妙楽寺遺跡では室町時代の大規模な屋敷跡がみついている。

平安時代後半以降は、県下では条里制が拡大していく時期でもあり、当該期の遺構はこうした耕地開発の影響があったことが推察される。福満遺跡群の当該期の集落については断片的にしかわかっておらず、今後、集落と耕地の関係など、社寺の荘園との関わりも含め、具体的様相を捉える事例の増加によって明らかになることに期待したい。

4. まとめ

福満遺跡では、30次におよぶ調査結果から、現段階で大別して「福満遺跡1期」～「福満遺跡8期」まで8つの画期を持つ複合遺跡であることが確認された。

この間には縄文時代の早い段階から生活の痕跡が垣間見え、集落や墓域が広がり、飛鳥時代以降には生活の場が物資の集約・管理などを行う公的性格を帯びた施設へと変容し、中世以降には耕地化していく様子が認められる。

福満遺跡群一帯は、犬上川右岸の河川の形成した自然堤防を含む氾濫原にかけて広がっており、低湿な場所に微高地を含む起伏のある地形に立地している。扇状地端部に近い湧水帯でもあり、灌漑施設がなければ水を得にくい扇状地と異なり、豊富な水に恵まれた場所である。また、犬上川に近接し、かつ東山道の西方1.5kmほどの位置にあることから、生活や水陸の物流拠点として優位な位置にあるといえる。こうした立地を十分に活用しながら、集落や墓域、物資集約・管理施設を展開させていったものと理解される。

また、このような変遷は福満遺跡にとどまるものではなく、近接する竹ヶ鼻廃寺遺跡・品井戸遺跡・西今遺跡・須川遺跡に及んでおり、中心となる位置はこれらの遺跡群内を各期により移動させている。これらの遺跡は共通性の高い性格の遺構を持ち備えており、一つの群として捉える必要があり、本稿では「福満遺跡群」とした。最後に、各期の概略を示し、結びとしたい。

福満遺跡1期は、縄文時代後期～晩期を中心とした時期である。明確な生活の痕跡を示す遺構が検出されていない一方で、多くの遺物が出土しており基準資料として扱われているが、その大半は福満遺跡4期（古墳時代前期）以

降の遺構面で検出された溝や河川から出土したものと考えられる。縄文時代の遺構面まで調査されたものは、第23次調査のB区のみと判断される。今後実施される調査において、下層遺構の調査が行われ実態が明らかにされることに期待したい。

福満遺跡2期は、弥生時代中期中葉から後葉を中心とした時期である。主として第25次調査で検出された方形周溝墓で構成される墓域から示される。この墓域は後期に継続されず造営が停止される。

福満遺跡3期は、弥生時代後期を中心とした時期である。第23次調査で検出された竪穴建物2棟と、第28次調査で検出された多角形竪穴建物1棟（SH14）等が居住域を示す資料であり、近隣の品井戸遺跡で大形方形周溝墓2基を含めた墓域の存在も明らかとなっている。未だ弥生時代後期初頭の遺構は不明であるが、墓域を2期の福満遺跡から品井戸遺跡へ移動させたことが捉えられる。居住域を明確に示すことのほか、福満遺跡2期と3期の間に断絶期が存在するのかどうか、今後の周辺調査を待ちたい。

福満遺跡4期は、古墳時代前期を中心とした時期である。第4次調査の竪穴建物（庄内式期）と第23次調査の竪穴建物3棟（布留式期）などから構成される。布留式期の居住区は近隣の竹ヶ鼻廃寺遺跡に広がり認められる。

福満遺跡5期は、古墳時代中期を中心とした時期である。第23次調査の竪穴建物A5区S279はカマドを持ち、竪穴建物A3区S1からは軟質の朝鮮半島系土器が出土する。同時期の遺構は、近隣の品井戸遺跡で確認が相次いでおり、壁構材の痕跡がみられる深い壁溝、周堤の外周を構成する建物構造を持つ事例が増加しているほか、居住域の範囲が拡大している。

福満遺跡6期は、古墳時代後期を中心とした時期である。第23次調査の竪穴建物5棟や溝が該当する。A5区竪穴建物S209は北辺中央部にカマドを持ち、カマド袖部前方に焚口飾りあるいは門柱石の痕跡とも思われる小穴が配置される。この時期には最も集落の規模が拡大され、次の7期の掘立柱建物の建設に伴い、強固な埋め戻し作業がおこなわれており、硬く叩きしまった埋土をもつ竪穴建物跡となっていることも特徴としてあげられる。

福満遺跡7期は、飛鳥時代～平安時代前期を中心とした時期である。掘立柱建物を主体とする建物群で構成され、物資の集約や管理を担う公的性格を帯びた施設が展開される。福満遺跡第23次調査の建物群の広がりのほか、福満遺跡第25次調査では長舎とも考えられる建物も検出されており、福満遺跡一帯に拠点施設が展開されていた。また当該期には竹ヶ鼻廃寺遺跡でも官衙施設が広がっていた。

この時期の建物については、建物主軸方位から福満遺跡7期A群と福満遺跡7期B群に分かれるほか、整地土を含めた詳細な時期差の検討も必要であり、今後さらに細分

される可能性を持つ。

また拠点施設の詳細な造営時期や性格については検討の余地を残すものの、その中心は福満遺跡群内において、移動があったものと想定される。

福満遺跡8期は、平安時代中期以降となり、中世集落の展開や耕地化が進む。平安時代後半以降は、県下では条里が拡大していく時期でもあり、こうした耕地開発の影響があったことが推察される。

福満遺跡の各期の概略は以上のとおりである。なお2・3期の弥生時代の様相、4～6期の古墳時代の様相もさることながら、いま最も注視したいのは福満遺跡7期の飛鳥時代～平安時代前期の様相であり、竹ヶ鼻廃寺遺跡の官衙施設の前身施設とも推定される建物群の広がりである。当該期の建物群は時期差を持つため、その間に生じている事象については、今後の検討課題としたい。

以上のように、福満遺跡群の調査成果は、犬上川右岸下流域の拠点遺跡の様相の一端を示しており、開発や土地利用等を考える上で極めて重要となる遺跡群と捉えられる。しかしながら、集落域や墓域・生産域の広がりとその詳細をはじめ先に指摘したいいくつかの点については、今後も検討を要する課題であり、調査事例の増加を待ち、実態の解明が望まれる。

[謝辞]

彦根市文化財課林昭男氏には、同市の調査成果のご教示や現地の実見など、多大なご厚情をいただいた。文末ながら、記して深い謝意を表したい。

註

- (1) 公益財団法人滋賀県文化財保護協会は、彦根市の依頼を受け、同市を調査主体、弊財団を調査機関として、2017・2018年度に同市福満遺跡の発掘調査を実施し、2023年度に報告書を刊行した（彦根市・公財協会2024）。
- (2) 本章の調査成果は特に記さない限り以下に拠る（県教委・財協会1986・1994、滋賀県埋蔵文化財センター2021・2022・2023、彦根市教育委員会1981・1982・1985・1987・1991・1996・1997・2004・2008a・2008b・2010a・2010b・2011・2013・2014a・2014b・2014c・2014d・2014e・2015a・2015b・2015c・2016・2017・2018a・2018b・2019a・2019b・2019c、彦根市2007・2020a・2020b・2021a・2021b・2021c・2021d・2021e・2022・2023a・2023b・2023c・2023d・2023e・2024a・2024b・2024c・2024d・2024e・2024f・2024g・2024h・2024i、彦根市・公財協会2024）
- (3) 各期については、福満遺跡第23次調査報告書（彦根市・公財協会2024）において提示した区分に準拠している。
- (4) 近年、近畿地方の大半の地域で、弥生時代中期に繁栄した多くの集落の断絶や縮小が認められること、その原因として災

害など自然現象の関与が想定されることが認識されるようになっている（中塚 2022、宮崎 2022、大阪府立弥生文化博物館 2023）。

- （5）品井戸遺跡第6次～第11次調査の調査成果については、彦根市よりご教示をいただいた。
- （6）稲部遺跡・極楽寺遺跡での朝鮮半島系土器の出土事例については、彦根市よりご教示いただいた。
- （7）『日本書紀』天智天皇四年二月条に「以百濟百姓男女四百餘人 居于近江国神前郡」同・天智八年是歲条に「男女七百餘人遷居 近江國蒲生郡」とあるなど、国策としての渡来系移住民の存在が知られる。
- （8）竹ヶ鼻廃寺遺跡第15次調査の調査成果については、彦根市よりご教示をいただいた。

文献一覧（著者名・機関名 50 音順、刊行年順）

* 文中では、滋賀県教育委員会→県教委、財団法人滋賀県文化財保護協会→財協会、公益財団法人滋賀県文化財保護協会→公財協会 と表記する。

泉拓良（1990）「西日本凸帯文土器の編年」『文化財学報』8 奈良大学文学部文化財学科

大阪府立弥生文化博物館（2023）『弥生時代巨大集落の盛衰』

大橋信弥（2010）「小野妹子・犬上御田嶽とそのふるさと」『専修大学社会性開発研究センター東アジア世界史研究センター年報4』専修大学社会性開発研究センター

北村圭弘（2001）「近江の山田寺式軒丸瓦と犬上氏」『西田弘先生米寿記念論集 近江の考古と歴史』真陽社

桐生直彦（2007）「古代堅穴建物遺構の発掘調査方法—奈良文化財研究所研修講義レジメ—」『土壁』第11号 考古学を楽しむ会

甲良町教育委員会（1996）『横関（法養寺）遺跡』甲良町埋蔵文化財調査報告6

佐伯英樹（2015）「礫と瓦を使用したカマド」『季刊考古学』131 雄山閣

財団法人京都市埋蔵文化財研究所（2006）『平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-14

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（1986）『下之郷遺跡』ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書13-2

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（1994）『北落古墳群Ⅰ』県営ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書21-4

滋賀県埋蔵文化財センター（2021）「塚本遺跡 第1次調査」『令和2年度滋賀県埋蔵文化財発掘調査成果報告集』

滋賀県埋蔵文化財センター（2022）「塚本遺跡 第2次調査」『令和3年度滋賀県埋蔵文化財発掘調査成果報告集』

滋賀県埋蔵文化財センター（2023）「塚本遺跡 第3次調査」『令和4年度滋賀県埋蔵文化財発掘調査成果報告集』

中塚武（2022）「年輪酸素同位体比を用いた弥生・古墳時代の気候・農業生産・人口の変動シミュレーション」『国立歴史民俗博物館研究報告』第231集 国立歴史民俗博物館

中村健二（2008）「凸帯文系土器（中四国・近畿・東海地方）」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション

西山集・春名英行（2024）「福満遺跡第1次・第2次調査出土凸帯文土器の再検討」『淡海文化財論叢』第十六輯 淡海文化財論叢刊行会

林昭男（2020）「犬上川右岸福満遺跡における方形周溝墓群の検出と派生する諸問題」『淡海文化財論叢』第十二輯 淡海文化財論叢刊行会

彦根市教育委員会（1981）『品井戸遺跡』彦根市埋蔵文化財調査報告書第2集

彦根市教育委員会（1982）『福満遺跡—発掘調査概要報告書—』彦根市埋蔵文化財調査報告書第4集

彦根市教育委員会（1985）『竹ヶ鼻廃寺・品井戸遺跡（第4次）』彦根市埋蔵文化財調査報告書第8集

彦根市教育委員会（1987）『福満遺跡』彦根市埋蔵文化財調査報告書第13集

彦根市教育委員会（1991）『竹ヶ鼻廃寺発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第21集

彦根市教育委員会（1996）『竹ヶ鼻廃寺Ⅲ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第29-1集

彦根市教育委員会（1997）『神ノ木遺跡』彦根市埋蔵文化財調査報告書第30集

彦根市教育委員会（2004）『新修彦根市史』編さんにともなう彦根市内遺跡・遺物調査報告書』

彦根市教育委員会（2008a）『福満遺跡X・XI』彦根市埋蔵文化財調査報告書第40集

彦根市教育委員会（2008b）『丁田遺跡Ⅰ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第43集

彦根市教育委員会（2010a）『竹ヶ鼻廃寺Ⅳ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第45集

彦根市教育委員会（2010b）『竹ヶ鼻廃寺Ⅴ・Ⅵ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第46集

彦根市教育委員会（2011）『丁田遺跡Ⅱ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第48集

彦根市教育委員会（2013）『竹ヶ鼻廃寺Ⅶ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第54集

彦根市教育委員会（2014a）「第5章 竹ヶ鼻廃寺遺跡（8次・9次）」『彦根市内発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第58集

彦根市教育委員会（2014b）「第3章 須川遺跡（1次）」「第6章 須川遺跡（2次）」『彦根市内発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第58集

彦根市教育委員会（2014c）『丁田遺跡Ⅲ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第57集

彦根市教育委員会（2014d）「第1章 西今遺跡1次」『彦根市内発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第58集

彦根市教育委員会（2014e）「第4章 道ノ下遺跡（1次）」『彦根市内発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第58集

彦根市教育委員会（2015a）「第2章 竹ヶ鼻廃寺遺跡（10次）」『平成25年度彦根市内遺跡発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第63集

彦根市教育委員会（2015b）『福満遺跡 第12次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第59集

彦根市教育委員会（2015c）『須川遺跡 第3次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第60集

彦根市教育委員会（2016）『福満遺跡 第15次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第65集

彦根市教育委員会（2017）『福満遺跡ⅩⅦ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第69集

彦根市教育委員会（2018a）『須川遺跡 第4次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第73集

彦根市教育委員会（2018b）『丁田遺跡 第7次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第74集

彦根市教育委員会（2019a）『丁田遺跡 第10次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第79集

彦根市教育委員会（2019b）「第2章 福満遺跡（14次）」『平成26年度彦根市内遺跡発掘調査報告書2』彦根市埋蔵文化財調査報告書第76集

彦根市教育委員会（2019c）「第4章 竹ヶ鼻廃寺遺跡（第11次）」『平成26年度彦根市内遺跡発掘調査報告書2』彦根市埋蔵文化財調査報告書第76集

彦根市（2007）『新修彦根市史』第1巻通史編 古代・中世

彦根市（2020a）『道ノ下遺跡 第2次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第81集

彦根市（2020b）『福満遺跡 第25次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第82集

彦根市（2021a）『福満遺跡 第7次調査』彦根市埋蔵文化財調査報告書第20集

彦根市（2021b）『山之脇遺跡 第2次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第83集

彦根市（2021c）『福満遺跡 第20次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第84集

彦根市（2021d）『山之脇遺跡 第3次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第85集

彦根市（2022）『塚本遺跡 第3次発掘調査現地説明会資料』

彦根市（2023a）「第2章 福満遺跡（第19次）」『度彦根市内遺跡発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第89集

彦根市（2023b）「第3章 須川遺跡（第7次）」『度彦根市内遺跡発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第89集

彦根市（2023c）「第4章 須川遺跡（第8次）」『度彦根市内遺跡発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第89集

彦根市（2023d）「第5章 須川遺跡（第10次）」『度彦根市内遺跡発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第89集

彦根市（2023e）「第1章 丁田遺跡（第6次）」『度彦根市内遺跡発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第89集

彦根市（2024a）「第3章 福満遺跡（第21次）」『彦根市内遺跡発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第90集

彦根市（2024b）「第4章 福満遺跡（第22次）」『彦根市内遺跡発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第90集

彦根市（2024c）『福満遺跡 第26・30次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第92集

彦根市（2024d）『福満遺跡 第27・28・29次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第93集

彦根市（2024e）「第1章 丁田遺跡（第9次）」『彦根市内遺跡発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第90集

彦根市（2024f）「第6章 丁田遺跡（第11次）」『彦根市内遺跡発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第90集

彦根市（2024g）「第2章 須川遺跡（第6次）」（彦根市内遺跡発掘調査報告書）彦根市埋蔵文化財調査報告書第90集

彦根市（2024h）「第5章 須川遺跡（第9次）」『彦根市内遺跡発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第90集

彦根市（2024i）『品井戸遺跡第5次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第95集

彦根市・公益財団法人滋賀県文化財保護協会（2024）『福満遺跡（第23次）』彦根市埋蔵文化財調査報告書第91集

宮崎幹也（1992）「滋賀県下におけるカマドの導入と普及」『滋賀考古』第8号 滋賀考古学研究会

宮崎幹也（2021）「古代における五世紀の移住民集落」『淡海文化財論叢』第十三輯 淡海文化財論叢刊行会

宮崎幹也（2022）「弥生時代後期における遺跡様相の変化—近江地域の事例から—」『高山流水—赤澤徳明氏退職記念論集』赤澤徳明氏退職記念論集製作委員会

宮崎幹也（2024）「竪穴建物の構造と調査方法」『淡海文化財論叢』第十六輯 淡海文化財論叢刊行会

望月精司（2007）「北陸西部地域における飛鳥時代の移民集落」『日本考古学』第23号 日本考古学協会

挿図典拠

図1（彦根市・公財協会 2024）に加筆。

図2（彦根市・公財協会 2024）に加筆。

図3（林 2020）に加筆。

図4（彦根市 2024i）に加筆。

図5（宮崎 2024）に加筆。

図6（彦根市・公財協会 2024）に加筆。

図7（彦根市 2020b）に加筆。

図8（彦根市 2007）に加筆。

（なかがわ はるみ：企画整理課 主幹）

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage
Vol.38 2025.3

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages